

## 戦前台湾における個人的伝道 (1)

## 個人的伝道

組織的伝道として前回(2022年5月号)で取り上げた山名大教会、また以前(同年3月号)で取り上げた南海大教会による伝道は、大教会や比較的規模の大きな教会が中心となっており、計画を立てながら、複数の布教師を派遣したり、経済的支援をしたりして伝道を進める方法である。この場合、現地での伝道方法に関する知識や情報を共有したり、伝道を進めるにあたって役割を分担したりすることによって、効率的に伝道が展開されることが見込まれる。これとは対照的に今回取り上げる個人的伝道は、もちろん系統や上級教会の支援を全く受けていないわけではないが、基本的には布教師が個人や家族だけで伝道を進める方法で、経済的基盤の脆弱性から、生計を立てるといって問題に直面しながら地道な伝道を少しずつ進めることとなる。その代表的布教師として二人の女性を取り上げる。

## 古谷マツによる伝道

マツは安政元年(1854)2月28日、山口県で農業を営む渡辺十郎左エ門、タケの長女として生まれ、同じく農業を営む古谷宇三郎に嫁いだ。宇三郎は生来病弱で、マツも長年の眼病に悩んでいたが、明治27年(1894)頃、防府大教会の初代古川太十郎のおたすけによって、夫婦ともに御守護をいただき、信仰を始めた。

夫婦の間に子が生まれなかったこともあって、かしの・かりもの教理が身に沁み、生涯をたすけ一条に捧げる心を決めた。明治28年(1895)に防府支教会が設立された。翌年に内務省の秘密訓令が発令されるという厳しい社会情勢の中にあっても、防府の布教師たちは、寝食を忘れておたすけに奔走。その情熱に感化され、宇三郎とマツも農業のかたわら、にをいがけ(布教伝道)に励んだ。

防府支教会では、古川太十郎が県外布教をめざし、布教師たちは県外に教線を広げていた。マツも「自分たちはお供えと言ってもたいしたことは出来ないから、せめてこの眼が使えるうちに先達に続いて県外布教に出させていだきたい」と願っていた。

そのような中、たまたまマツのいとこである渡辺という婦人が台湾で軍人相手の料理旅館を開くべく準備中であることを知り、台湾布教を思い立ち、古川に台湾布教を願った。

台湾は明治28年(1895)に日本の統治下となっていたが、当時マツが台湾布教を願い出た翌明治29年は、台湾住民の人心騒擾や日本人の虐殺などの物騒な話が新聞紙上に掲載されていた時期で、御守護いただいたとはいえ、まだ眼の不自由な、しかも女性の単身渡台布教という危険な願い出であり、最初は相手にされなかった。しかしマツの真実こもる執拗な願いに、ついに古川も承諾せざるを得なかった。こうして明治29年8月、おさづけの理も拝戴していなかったが、マツは渡辺女史一行と共に渡台した。マツ41歳の時であった。マツは渡航に当って、マツの姪であるイトを養女にもらい、夫である宇三郎の後事を托して出発。当時防府の役員としてつとめていた宇三郎は

「台湾に骨を埋める覚悟で行ってこい。いかなる事があっても、一つの実を結ぶまでは決して帰国するでないぞ」と激励し、これをはなむけの言葉にした。

マツは渡辺女史の家に寄宿し、にをいがけに専念した。当時の台湾は日本による統治がはじまって間もない頃で治安も悪く、しかも文化や言語も異なる中で布教は、苦難の連続であり、後年マツ自身も、「皆様の忠告を押しきって台湾に渡ったことを後悔し、いっそ内地に引揚げて布教しようと、なんど思いつめたことか」と述懐している。

夫の出直しにもマツの布教意欲は挫けず、苦節数年。必死の布教によってようやく一つの講を結ぶ目安が見ついたので、明治35年(1902)7月に養女のイト夫婦を山口県から呼びよせた。

天理教の信仰と家の後継者を得て、マツはますます熱心に布教し、翌明治36年(1903)5月2日、台北市府中街で台府布教所を開設。これに先立って、明治35年にマツは渡台後初のおさづけををし、念願のおさづけの理を拝戴したが、マツに教導職がないため、イトの夫である若蔵が所長に就任した。その時、すでに信者は56戸あり、その内、本島人(台湾人)が29戸あった。

ついで台北庁加納堡三板橋東門外に100坪の土地を購入し、23坪余の教会を建設し、明治36年9月19日防府の直属として台府教会を設立した。

その後、若蔵会長を中心に、マツ、イトの丹精によって信者が増加し、教会が狭小になったため、大正2年(1913)7月、大加納堡艦舥八甲街(後に台北市若竹町と改名)に移転した。

翌大正3年(1914)3月、若蔵は身上のため43歳で出直した。当時、子どもの貞義は、台北第一中学に通学しており、マツは老齢で、イトは教導職がなかったため、役員の幸田嘉一郎が会長代務者となり、大正7年(1918)10月に、貞義が会長に就任した。

マツは大正12年(1923)、台府教会で出直した。享年71歳。その当日の7月14日朝、マツは「今日中に引取ってやると親神様仰言ったから、私は今日中に直しますよ。私は泣いて別れるのはイヤやから、赤飯に鯛を添え、お神酒で祝うてお別れしましょう」と家人に言ったが、家人は、お粥に飽きたから赤飯を食べたいという催促だろうと思っていた。赤飯を炊いたが箸は付けず、牛乳を少し口に入れてだけで、そのまま昏睡状態となり、十数人の信者たちに見守られ、その夜12時ちょうどに眠るように出直したという。その当時すでに部内には、台中市(陽台と改称)教会の他、宜蘭、東門、府南、嘉南、新竹の五カ所の布教所が設置されて、台北、台中、台南、嘉義方面に教線が広がっていた。

その後、若竹町の教会も信者の増加で狭小となり、台北市幸町という市内屈指の住宅地に503坪の土地を取得、昭和15年(1940)4月に104坪の神殿及び附属屋を建設した。

## [参考文献]

天理教海外伝道部アジア課『フォルモサ』創刊号(1967)、35～38頁。